



Title	ネメシス号の世界史
Author(s)	吉澤, 誠一郎
Citation	パブリック・ヒストリー. 2013, 10, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66511
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ネメシス号の世界史

吉澤誠一郎

1 歴史学の「国境」とは何か

大学院生のころ、指導教官だった濱下武志先生から、「学問に国籍はあるでしょうか」という趣旨の問いかけを受けたことがある。自分で何と答えたかよく覚えていないが、たぶんの確に応じることはできなかったのであろう。

しかし、この問いかけは、今でも難問として私の前にある。多くの学問はそもそも非常に現実的な政治・経済・社会的な条件のもとで生まれ、にもかかわらず（否！だからこそ）全人類に通用する普遍性をめざしている。

たとえば、「東洋史」という学問は、明治時代の日本社会の要請と密接に結びついて誕生している。パーレー『万国史』など19世紀に力をもっていた「普遍史」の叙述が実質的にはヨーロッパ中心のものであり、ときにアダムとイヴから説き起こすようなキリスト教の観念と結びついていたことは、明治の日本人にとって受け入れがたかった。⁽¹⁾これに対抗して「東洋史」を構想しようとする欲望が起こってきたのは当然のことであった。他方で、中国大陆に興亡した王朝を中核とした歴史の説明にも、当時の人々は満足しがたい感じをもっていた。むしろ、これを「支那史」として相対化つまり脱中心化するために、「東洋史」という学問が想定されたのであり、当初から特別に「満鮮史」「塞外史」が重視されていたことになる。⁽²⁾

しかし、そのような東洋史学の論文が必ずしもイデオロギー的であったわけではなく、むしろ当時の欧米の学界を意識して、いってみれば「国際水準」の研究を行なうことが当初から企図されていた。そこでは、東西交渉史研究における地名の比定などを初めとして、精緻な考証

(1) Peter Parley's *Universal History, on the Basis of Geography*, New York, 1860. パーレーというのは米作家グッドリッチ (S. G. Goodrich) の筆名である。日本で刊行されたものを含め版本は多い。ここには私のみとうちでは最も古いものを挙げておいたが、もっと古い版もあるかもしれない。

(2) 以上の事情について詳しくは、拙稿「東洋史学の形成と中国——桑原隲蔵の場合」（岸本美緒編『「帝国」日本の学知3 東洋学の磁場』岩波書店、2006年）参照。

がなされてきた。⁽³⁾他方で、たとえば中国近代史研究は、そのような戦前の研究伝統のなかでは、まともな分野とみなされていなかったことになる。中国近代史研究が大きく展開するのは、戦後の思潮のなかでのことである。⁽⁴⁾

さて、話を「学問の国籍」ということに戻すならば、1950年代・1960年代における日本の中国近代史研究は、中国人による研究から大きな刺激を受けながら、やはり日本人の世界史認識の一部として存在していたといつてよいだろうと思われる。同じ時代の中国においても、歴史叙述は中国人のためになされていたというほかない。他方で、むろん、学問は客観性をめざすものであるから、研究者の主観としてはあくまで誰もが認める論証を行なおうとしていたはずであり、研究成果が国境を越えて参照されていたことも確かである。しかし、日本における学術と中国における学術とを隔てる政治的な障壁は非常に高かったというべきであろう。

その後、中国が改革開放の時代に入ることによって、状況は変わってきたかどうかが問題となる。ひとつ挙げられるのは、学者の訪問、学生の留学を含めた交流の活潑化である。そして、日本国内でも中国籍の研究者が活躍するようになってきた。

他方で、中国には、はっきりと公式の歴史観があり、それは相当の程度に社会的な影響力を持っていることが指摘できる。⁽⁵⁾これは、確かに現今の中国の政治体制の結果でもあるのだが、その要因だけとは限らない。歴史と政治的正統性が結びついた政治文化が、すぐ消滅するとは考えにくい。

私にとっては、このような状況のもとでは、やはり学問の普遍性を強調し、国籍を問わず承認できる史実を想定していく必要性を強く感じる。すべての言説の政治性・相対性を高唱する一部の論者を私が痛撃してやまないのは、そんな当たり前のことを今さら指摘してくれるなどという気持ちのほかにも、誰もが承認できるように学問的手続きによる論証を行なうという場を意識的に構築することが不可欠と信じているからである。

「学問に国籍はあるのでしょうか」。濱下先生も、自問されていたことかもしれない。この問いが、狡知にみちたとさえいえる深い洞察を含むのは、是と答えても否と答えても誤りであるからである。「国籍はある」という認識にとどまれば、日本人が日本語で書き語る範囲に視野が限定されてしまい、それに自足して墮落するほかない。「国籍はない」といえば、それは学問の普遍性を安易に信じてしまい、厳存する国境を越える努力を怠る結果となりかねない。

結局のところ、この問いは、いまでも私にとって課題でありつづけているのである。

(3) このような研究について、戦後の歴史学の観点からは「そこには民衆や社会の悩みは全くない。精巧な研究であるが、現実とは縁の遠いものである」と指摘される。旗田巍「日本における東洋史学の伝統」（『歴史学研究』270号、1962年）、31頁。

(4) ここでいうのは歴史研究に限定した議論であり、同時代中国についての関心は常にあったといつてよい。

(5) このような点について簡明に論じた書物として、劉傑『中国人の歴史観』（文藝春秋、1999年）を挙げておく。

2 ネメシス号画像の謎

次に少し話題を変え、歴史教育について考えてみたい。私は、高等学校で現在使われている世界史 B という科目の教科書『新詳世界史 B』（帝国書院、2007 年文部科学省検定済）の執筆に加わっている。また、指導要領の改訂を受けて 2013 年 4 月から使われる予定の同社の教科書の作成にも参加した。そのなかで、他社の教科書も集めて記述を検討する機会があった。

各教科書とも限られた紙幅のなかで、さまざまな工夫を凝らしていることがわかるものの、少なくとも中国近代史については、やや納得しがたい記述も多々見られる。

ここで、とくに検討してみたいのは、アヘン戦争の図像として多くの教科書に掲載されている銅版画のことである。後で詳しく述べるが、これは、1841 年 1 月 7 日に珠江河口付近の虎門で行なわれた海戦の様子を描いたものである。蒸気船ネメシス号の活躍した戦いとして知られている。私が調べることでできた 22 種の教科書のうち 19 種までが、この絵を挿絵として掲げている。たいへん有名な図像と言ってよい。

しかし、この絵については、いくつかの疑問が存在する。それについて、少し問題提起してみたい。この絵は何を描いたものなのだろうか。私には、十分に説明できないところがある。教科書にこの図が載せられている場合には、この戦いについて説明が加えられていることが多い。これについて、表で整理した（14 頁を参照）。

もうひとつ留意すべきなのは、高校教科書に載せられているこの戦いの絵には、類似しているが異なる 2 枚があるということである。表ではそれを【甲】【乙】として示した。【甲】【乙】は色合いの違いのほか、容易に区別できる特徴がある。【甲】は右端にボートがあって何かを発射した様子に見えるが、【乙】にはそのボートが描かれていないのである。

多くの教科書は、東京都文京区にある東洋文庫に所蔵される版画の写真を用いているものと思われる。実は、東洋文庫にも、この【甲】【乙】2 種の版画が所蔵されているのである。⁽⁶⁾なお、これらは版画であるから、同じものが複数あるのは自然なことといえる。私が実見したわけではないが、英国グリニッチの国立海事博物館にも【甲】が所蔵されていることが知られている。⁽⁷⁾ただし、同じ【甲】でも東洋文庫とグリニッチのとでは色合いが異なる。おそらく版画を刷ったあとに、手で彩色がなされたからであろう。

もうひとつ、教科書ではわからないが、【甲】と【乙】とでは絵の下に説明してある英語の文言に相違がある。【甲】では次のように記されている。

Nemesis, with Boats of Sulphur, Calliope, Larne, and Satrling, destroying the Chinese
War Junks in Anson's Bay, Jan. 7, 1841.

(6) 図録『東洋文庫の名品』（東洋文庫、2007 年）、274-275 頁に掲載されている。私は、これら 2 枚を実見したことがある。

(7) 挿絵として使っているものとして、以下がある。Patricia Buckley Ebrey, *The Cambridge Illustrated History of China*, Cambridge, 1996, p. 237. 古澤誠一郎編『歴史からみる中国』（放送大学教育振興会、2013 年）。

これに対し、【乙】では、簡単に

Nemesis destroying the Chinese War Junks in Anson's Bay, Jan. 7, 1841.

と説明されているだけである。この説明の文言の違いは、【甲】に描かれているボートが【乙】に無いことに対応しているのであろう。このことから見ても、【甲】と【乙】が一応の別の版画として作成されたと考えてよい。



図1 ネメシス号を描いた銅版画（ダンカン作【甲】）



図2 ネメシス号を描いた銅版画（ダンカン作【乙】）

次の難問は、なぜ【甲】【乙】というほとんど同じ構図の版画が作られたのかということである。これは、よくわからない。版画の作者エドワード・ダンカン（Edward Duncan, 1803-1882）はそれほど有名ではないが、当時は海洋の絵画を得意とする画家であったらしい。⁽⁸⁾ 彼がどういう経緯でこの絵を作製したのかは未詳である。

ところで、同じ海戦を描いた銅版画としては、テリー（G. W. Terry）という画家が作製した全く別の構図のものがある。⁽⁹⁾ 蒸気船ネメシス号のほかに、イギリス側の五隻のボートが見える。このテリーの絵のほうが、両軍の対戦の様子が明解に示される構図になっている。ボートに大砲を載せて発射するという戦法をイギリス側がとっていることも、よくわかる。下の説明には

The Hon. East India Company's Steamer "Nemesis" and the Boats of the Sulphur, Calliope, Larne, and Starling, destroying the Chinese War Junks in Anson's Bay, January 7, 1841.

とある。ネメシス号が東インド会社の蒸気船であるという説明を加えているほかは、ほぼ【甲】と同じ文言である。

これと比べると、【甲】【乙】は、イギリス軍があまり目立つように描かれていないことが印象づけられる。【甲】【乙】のいずれも、中央にあるのは清側の軍船であり、ネメシス号は右の奥のほうに出てきているだけで、あまり迫力はない。しかも、【乙】に至っては攻撃しているボートすら無いので、ネメシス号が単独で戦っているように見えてしまいかねない。



図3 ネメシス号を描いた銅版画（テリー作）

(8) ダンカンの略伝としては、次の小冊子がある。Frank L. Emanuel, *Edward Duncan, R. W. S.: Painter in Oil and Water-colour and Engraver* (Walker's Quarterly, no. 13), London, 1923.

(9) 秦風西洋版画館編著『西洋銅版画と近代中国』（福建教育出版社、2008年）、13頁。

ダンカンやテリーが何に基づいて原図を作製したのかは考察するすべがないが、この戦いについての記録は参考にしたかもしれないし、何か伝聞情報があったかもしれない。しかし、戦場でスケッチした者がいたとは考えにくいから、これら銅版画の構図そのものは、画家の創作にかかると当面は推定しておきたい。そう考えると、いっそうダンカンによる【甲】【乙】の構図でイギリス船が目立たないようにしていることが奇妙に感じられてくる。絵に附された英語の説明は、あくまでイギリス側の勝利を示唆するものだからである。

もうひとつ、ダンカンの絵で理解しにくいのは、中央右のジャンクが炎上している理由である。【乙】であれば、ネメシス号しか見えないし、そもそも下に記された英語の説明はネメシスが単独で戦っているという趣旨なので、ネメシス号の攻撃によって炎上が起こったと考えるのが自然な見方であろう。しかし、【甲】ではどうだろうか。右端のボートは大砲を発射したところに見えるから、それが命中して炎上したということもありうる。しかし、そもそも、そのボートから見てもっと近いところに別のジャンク船があるのに、なぜわざわざ遠くの船に向けて発射しているのかという疑問が残る。とすれば、【甲】でも炎上の原因となる攻撃を行なったのは、ネメシス号なのかもしれない。ひとつの可能性として、【甲】のもつそのような曖昧さを払拭してネメシス号の役割を強調するために【乙】が作製されたという想定もできるだろう。

私が気になるのは、表にした教科書の説明のすべてにおいて、ボートによる攻撃がなされていた点が無視されていることである。実は【甲】の絵を掲げているにもかかわらず、そのボートの全体が途中で切り取られていたり、ボートの発射した砲弾の煙だけが示されていたりする例があり、【甲】と【乙】とを比べたうえで意識的に【甲】を選択して掲載したのかどうか、疑わしい感じも受ける。結局のところ、ボートのない【乙】を見たのと大差ない説明となっているのである。

3 虎門の戦いの実相

いずれにしても銅版画は、戦闘の一場面を正確に写し取ったものとは考えにくい。それにしても、1841年1月7日と特定されているのだから、このときの戦いはどのようなものであったのか、とくにネメシス号はどれほどの攻撃力を発揮していたのかという疑問が起る。

まず簡単にこの戦闘に至る経緯から説明してみよう。1839年、林則徐がアヘン取り締まりを行なう際にイギリス側に非常に強硬な措置をとったことから紛争は拡大し、1840年にはケープおよびインドから清側に向けて遠征軍が派遣された。イギリス軍は広東を封鎖して北上し、浙江省の定海を占領したのち、天津に近い白河の河口に至った。ここでイギリス次席全権のチャールズ・エリオット（Sir Charles Elliot, 1801-1875）は直隸総督琦善と折衝し、広東で再び交渉することを約束した。12月、広東でエリオットと琦善は交渉を続けたが、合意を見るこ

となく、イギリス側は事前予告を経て、翌年1月7日に攻撃を開始した。⁽¹⁰⁾これが当該の銅版面に記されている日付に他ならない。

この日の戦いは、次のようなものであった。⁽¹¹⁾戦いの焦点は、虎門（Bocca Tigris ないし Bogue）と呼ばれる珠江の河口付近で起こった。ここから遡ると広州に至る水路の要衝にあたる。清朝側はいくつもの砲台を設け海上にも軍船を配備して防備を固めていた。これは、それ以前の紛争の事例を踏まえた態勢であって、イギリス軍は数隻で来て虎門を突破して遡上するものと想定されていた。すなわち、海戦ではなく、主に砲台からの攻撃によってイギリス軍を撃退しようとしていたのである。

しかし、イギリス軍は清軍にとって全く意想外の作戦に出た。まず、カライオペ号（Calliope）、ハイヤシンス号（Hyalanth）、ラーン号（Larne）が、2隻の汽船クイーン号（Queen）とネメシス号とに援護されて（ときに曳航されて）河を遡り、河の入り口にあたる沙角の砲台に向けて砲撃を始めた。その間にネメシス号を含む汽船と小船とで、砲台から4kmほど離れた地点に兵1461名を上陸させた。上陸した部隊は、高い場所に大砲を据えて沙角山上の小砲台を攻撃し、次々に清軍を破って沙角砲台に迫った。汽船4隻も海からの砲撃を行ない、こうして沙角砲台およびその周辺の清軍は撃破されたのだった。

また河の対岸にあたる大角砲台に対しては、英艦4隻が砲火を浴びせた。その砲台の攻撃力がなくなったところで小舟によってイギリス兵が上陸し、砲台まで進んで陥落させた。

さらに、沙角砲台の攻略が終わったあとで、海上でも戦いがあった。それは、沙角砲台から少しだけ河の内側にあるアンソン湾（Anson's Bay）でのことである。ここでは、汽船ネメシス号と小船が清朝の軍船を破った。小船とは、カライオペ号、ラーン号、ハイヤシンス号、サルファー号（Sulphur）、スターリング号（Starling）に属するものである。

これで、この1月7日の戦いは終わったが、イギリス軍は更に清軍の砲台に対し、海上からの砲撃と陸上部隊によって攻略する作戦を進め、ついに2月26日にはこの虎門一帯の清側の防備を撃滅するに至ったのであった。

このうち、前の章でみたネメシス号の銅版画はアンソン湾の戦いを描いたものであることは、銅版画そのものの説明文から明らかである。ダンカン【甲】やテリーの版画の説明に見えるボートというのが、別の帆船に所属するものであることも理解できる（ハイヤシンス号のボートの有無について説明が異なっているが、その他の船名は一致している）。

ネメシス号の作戦については、もう少し詳しく見ておこう。この船の経験については、当時の船長ウィリアム・ホール（Sir William Hutcheon Hall, 1797?-1878）の記録にもとづいて、ウィ

(10) ここまでの経緯については、佐々木正哉「アヘン戦争初期の軍事と外交（上）——琦善とエリオット」（『軍事史学』5巻2号、1969年）参照。

(11) 以下の記述は、次の研究に基づく。Gerald S. Graham, *The China Station: War and Diplomacy, 1830-1860*, Oxford, 1978, p. 147. 茅海建「1841年虎門之戦研究」（『近代史研究』1990年4期）。同『天朝の崩潰——鴉片戦争再研究』（三聯書店、1995年）、219-233頁。

リアム・バーナード（William Dallas Bernard）という人物がまとめた書物がある。⁽¹²⁾ 1月7日の朝、ネメシス号とエンタープライズ号（Enterprise）、マダカスカル号（Madagascar）は上陸部隊を岸に届ける任務を果たした。これらはいずれも汽船である。また、自らの帆船に附属する小船で上陸した者もいた。そのあと、ネメシス号は、汽船クイーン号とともに、沙角山上の砦を海から攻撃した。クイーンの68ポンド砲そしてネメシス号の32ポンドの旋回砲（pivot-guns）から放つ榴散弾が威力を発揮したと記されている。⁽¹³⁾

続いて、アンソン湾の戦いは、ネメシス号と小船とが清側のジャンク船を攻撃したものである。ネメシス号は喫水が浅く、6フィートに満たなかったため、32ポンド砲の射程に敵船を収めるまで近づくことができた。⁽¹⁴⁾ しかし、ネメシス号が発射して驚異的な結果を得たのは、実はCongreve rocket（Congreve rocket）であった。「いかなる船でもそうだが、とくに汽船が使えるうちで最も強力な破壊兵器はCongreve rocketである。それは、的確に使えば実に恐るべき兵器で、とくに攻撃対象に可燃物があるときにはそういえる」。⁽¹⁵⁾ 実際に、ネメシス号が最初に発射したCongreve rocketは劇的な効果を収めた。それがあつたジャンクに当たって大爆発を起こしたのである。おそらく、ジャンクの火薬庫に引火したのであろう。ネメシス号はこれをさらに発射し、清側のジャンク船を駆逐する戦果を得た。

ここでいうCongreve rocketとは何であろうか。これは英国人ウィリアム・Congreve（Sir William Congreve, 1772-1828）が開発した兵器であり、弾薬をつめたロケット花火を飛ばすようなものと考えられる。⁽¹⁶⁾ このロケット弾が命中してジャンクが炎上する光景が、ダンカンやテリーの版画の場面にあたると考えて良いだろう。

そこで、再度、銅版画について検討してみたい。まずテリーのほうは、砲火の主力である帆船が近づけない海域に多数のボートを繰り出すなか、ネメシス号が近くのジャンクを爆裂させた様子を示していてわかりやすい。これに対し、ダンカンのほうは、確かに最も手前のジャンクについては印象的であるが、攻撃がどの船によってなされたのか見づらい構図になっている。【甲】のほうは、やはりボートの砲弾が当たってジャンクが壊れているようにも見る余地がある。【乙】はその可能性を排除しているのでネメシス号が攻撃したと見るほかないが、それでもネメシス号が主役であることが強調されていない。しかも、手前のジャンクのせいでネメシス号の攻撃と爆発との因果関係が明示されないような構図を選んでいるので、依然として不思議な印象が残る。

(12) W. D. Bernard, *Narratives of the Voyages and Services of the Nemesis, from 1840 to 1843*, 2 vols., London, 1844. ホールの略歴については、H. C. G. Matthew and Brian Harrison eds., *Oxford Dictionary of National Biography*, vol. 24, Oxford, 2004, p. 672 参照。バーナードについては、その著書に A. M., Oxon とある学歴以外は未詳。バーナードは、1842 年に中国を訪れ、そこでネメシス号とホール艦長に出会ったという（Bernard, *op. cit.*, vol. 1, p. iii）。

(13) Bernard, *op. cit.*, vol. 1, pp. 257-262.

(14) *Ibid.*, pp. 268-270.

(15) *Ibid.*, pp. 270-271.

(16) Frank H. Winter, *The First Golden Age of Rocketry: Congreve and Hale Rockets of the Nineteenth Century*, Washington, D. C., 1990. 同書はネメシス号についても言及している（p. 35）。図 4 も同書による（p. 58）。

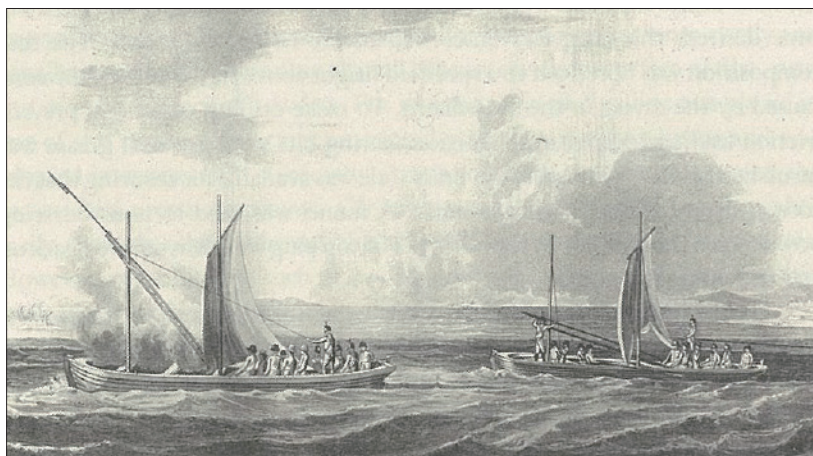


図4 コングリーヴ・ロケット

4 ネメシス号の歴史的位置

さて、それではこのようなネメシス号の活動について、どのように歴史的に考えるべきなのか。

ネメシス号は、武装された鉄製の汽船としては、実戦で用いられたごく初期の例である。かりに他の先例があったとしても、世界で最初に目立った活躍をした鉄製汽船であると言ってよいだろう。ネメシス号以外にも、イギリス側は汽船を大いに活用して清側を軍事的に圧倒したのであった。

しかし、それは、本格的な海戦において、汽船が大きな役割を果たしたということを意味しない。ナポレオン戦争におけるトラファルガーの海戦（The Battle of Trafalgar）、日清戦争における黄海海戦、日露戦争における日本海海戦のように、艦隊と艦隊とが海上で砲火を交えるというような戦いは、アヘン戦争の勝敗を左右したものではなかったのである。

アヘン戦争は、清側が陸上に設けた防衛拠点をイギリス側が撃破していくという形で主に戦われた。前に紹介した虎門の戦いも、その代表的な一局面といえる。すなわち、アヘン戦争は、艦隊の力によって制海権を争うという勝負ではなかったのである。

アヘン戦争でネメシス号を含む汽船が大きな活躍をしたのは、風に関係なく動けるうえ、喫水が浅いという特性ゆえであった。先に紹介した 1841 年 1 月 7 日の事例では、上陸部隊を運んだり、浅い海域に入ったり、河を遡行したりして機動的に動けるという点で、特別の働きがあった。その他にも、沿海ないし河川での航行、ときに帆船の曳航において、汽船は不可欠であった。⁽¹⁷⁾ アヘン戦争において清朝が屈したのは、イギリス軍が長江を遡行して、（大運河をお

(17) この点については、横井勝彦『アジアの海の大英帝国——19 世紀海洋支配の構図』（同文館、1988 年）、64-90 頁、D. R. ヘッドリック（Daniel R. Headrick）『帝国の手先——ヨーロッパ膨張と技術』（日本経済評論社、1989 年）、51-68 頁が概観を与えてくれる。

さえる地点にある) 鎮江を陥落させたことを、契機としている。帆船だけでは、この作戦は困難だったろう。このことからみても、汽船が果たした役割を過小評価してはならない。

しかし、他方で、汽船による艦砲射撃の破壊力がどれほどであったのかについては、慎重に見ていく必要がある。ネメシス号は、2 門の 32 ポンド砲を旋回式の砲架に装備していた。加えて、真鍮製 6 ポンド砲が、左右に向けて 2 門ずつ、艦橋に 1 門あった⁽¹⁸⁾。あわせて 7 門である。これに対し、たとえば司令官ブリーマー (Sir James John Gordon Bremer, 1786-1850) が乗っていた帆船ウェルズリ号 (Wellesley) は 74 門を備えており、当時の戦列艦であればこの程度の装備は通常といえよう。むろんフリーゲート艦やもっと小さい艦でも 20 門以上をもっていることも多かった⁽²⁰⁾。

こうしてみると、ネメシス号は砲火が卓越していたわけではない。外輪船という構造上の特性から、舷側に大砲をずらりと備えることは難しかったからでもあろう。むしろ、沿岸を動き回って砲撃するときの機敏さが重要だったのである。換言すれば、大海で戦列艦が決戦するような場合には、外輪が攻撃にさらされやすいこともあって、使いにくい代物だったと考えたほうがよい。

また、アンソン湾の戦いでは、大砲よりもCongreve・ロケットが大きな意味をもっていたことにも注目しておきたい。これは、Congreve・ロケットは確かに発明の才能の産物ではあるが、後に近代戦につながる兵器ではなく、鉄艦の時代になると廃れてしまうことになる。しかし、燃えやすい素材で作られたジャンクに対しては、相当に有効な火器だったのである。

次に、ネメシス号について、その構造上の特徴を確認したい。ネメシス号は、マージィ河口のバーケンヘッドにあったジョン・レヤード (John Laird, 1805-1874) の造船所で作られた。700 トンで長さ 184 フィート、幅 29 フィート、高さ 11 フィートの大きさをもち、120 馬力のエンジンを備えていた。荷物を積んだときの喫水は 6 フィートだが、普通ならば 5 フィートだった。この喫水の浅さは、固定された竜骨 (keel) が無いという特殊な構造によっていた。このような扁平な形状の不利な点を避けるために、可動式の竜骨はついていた⁽²¹⁾。

ネメシス号は 1840 年に完成した。この建造の経緯には、東インド会社のために作られたが、その目的をなるべく隠すようにされていたという特異性もある。艦長となったホールは、かつて英国海軍に属していたが、汽船について造詣を深めていた人物であった。東インド会社は、それまでに汽船の有効性を認識していたが、英国海軍は汽船や鉄艦については懐疑的であった⁽²²⁾。このような新技術導入に対する躊躇には、経費がかかりすぎたり、技術が不安定だった

(18) Bernard, *op. cit.*, p. 14.

(19) David Lyon and Rif Winfield, *The Sail and Steam Navy List: All the Ships of the Royal Navy, 1815-1889*, London, 2004, pp. 98-99.

(20) アヘン戦争にイギリス側が投入した艦船の一覧は、張建雄・劉鴻亮『鴉片戦争中の中英船舶研究』(人民出版社、2011 年)、74-77 頁参照。

(21) Bernard, *op. cit.*, pp. 6-8.

(22) ヘッドリク前掲書、17-49 頁。

りするという現実的な要因もあった⁽²³⁾。

このような意味で、東インド会社がネメシス号を建造し実戦に投入したことには、当時としては最近の技術を試してみるという意味があったことがわかる⁽²⁴⁾。とすれば、それはあくまで実験であって、すでに安定した技術として鉄製汽船が存在していたわけではないと見ることもできる。そして、ネメシス号にしても、蒸気機関で走るのは（燃費も悪いため）多量の石炭が必要であり、大海ではやはり帆走していたことも、留意しておくべきである。

巨視的にみれば、ネメシス号の活動は、過渡期における先駆者としての意味がある。19世紀の初め、トラファルガーの戦いでは、木造帆船が主力艦だった。木造船から鉄船へ（そして鋼鉄の船へ）という変化は、19世紀を通じて次第に進んでいった。帆船から汽船へという変化は、いっそう緩慢であった。このような変化について、すでに服部之総が「黒船前後」（初出は1932年）で次のように指摘している。

鉄で船を造ることは、技術的には、ヘンリー・コートが鉄板製造法を発明したことで（18世紀末）可能になった。だがその後も長いあいだ、水に沈む代物で船が造れるもんかという意見が支配していた。…世界に君臨する大英国海軍ですら、鉄造戦艦をはじめて持ったのが1860年である。…船材としての木と鉄の競争は、帆船と汽船の闘争とはまた別のことがらであった。強いていえば帆船は鉄造船時代に入るとともに最後の発展段階に到達して、なお初期の発達段階にあった汽船にたいする競争力を一時増した⁽²⁵⁾のである。

このように鉄製の帆船がそれなりに優位性を発揮する時期もあったことになる。

また、加えて、銃砲の技術についても19世紀は大きな過渡期であったことも忘れてはならない。アヘン戦争の時代には、銃口から装填する前装式がまだ主流を占めていた。19世紀中頃の技術革新によって、後装式が急速に普及するようになっていったのである。同じ時期に施条（銃砲のなかに螺旋状の溝をつけること）も進んでいく。中国の学者による最近の研究では、アヘン戦争期の船や銃砲について、確かにイギリスのほうが多様な点で技術が勝っていたことが詳細に分析されている。他方で、その技術の相違は、程度の差であって、全く異質な次元にあったというわけでもないことも併せて指摘⁽²⁶⁾されている。アヘン戦争を軍事の側面からみる場合の難しさは、このような過渡期の歴史性をどのように理解するのかというところにあるというべきだろう。

この点は、1853年の「黒船」来航という日本史の出来事にも関係してくる。周知の通り、

(23) ギャリン・ムロイ「19世紀のRMA」（田所昌幸編『ロイヤル・ネイヴィーとパクス・ブリタニカ』有斐閣、2006年）。Ben Marsden and Crosbie Smith, *Engineering Empires: A Cultural History of Technology in Nineteenth-century Britain*, Basingstoke, 2005, pp. 88-128.

(24) このことから、ダンカンやテリーの銅版画が、新技術の有効性を示す効果を持っていたと考えることは可能である。しかし、そのことが版画作成の目的や意図であったか否かは不明である。

(25) 服部之総『黒船前後・志士と経済 他十六篇』（岩波書店、1981年）、5-7頁。

(26) 張・劉前掲書。

この年、浦賀沖に現れた4隻のアメリカ船のうち、2隻のみが汽船であり、2隻は帆船であった。いずれも木製である。

アメリカ合衆国の海軍がこの時点でどれほど蒸気力を評価して採用していたのかは、また別の話となる。少なくとも、19世紀において急速に技術進歩を果たしていた欧米の艦船や銃砲に接して、幕末の人々は強い衝撃と大きな脅威を感じていただろう。そして、このような日本の歴史経験が、ネメシス号銅版画の見方にも影響を与えているのかもしれない。

確かに、ここまで述べてきたような軍事的な事情を日本の高校生に丁寧に教えるというわけにはいかないだろう。しかし、ネメシス号は、あくまで過渡期の実験的な存在であり、だからこそ清軍の意表をついたという経緯、ネメシス号は海戦の主役ではなく、上陸する部隊を運んだり主力艦を曳航したりする任務を負っていたこと、ジャンクを爆裂させたのは一種のロケット弾だったといったことを踏まえて、アヘン戦争において軍事力のもった歴史的意味を考えていくことは不可欠だと思われる。

5 結びにかえて

かつて、中国近代史の始点は、アヘン戦争であるとされていた。それは、イギリスと戦って負け、⁽²⁷⁾「不平等条約」を結ばされ、その結果として資本主義の世界の中に中国が組み込まれたという考え方によるものである。⁽²⁸⁾そして、林則徐の愛国精神や民衆の抗英運動を称讃し、イギリスとの妥協を求めた琦善を売国奴とみなす見方が、中国では広まっていた。

中国の歴史家である茅海建は、アヘン戦争についての本格的な研究（1995年刊）のなかで、林則徐や琦善の評価に対しても、新しい見方を示した。そこには簡単な要約を許さない微妙な再解釈がなされているが、なかでも、妥協せず徹底抗戦をめざすといった姿勢でイギリスとの戦いに勝てたとは考えられないという論旨が展開される。そうすると林則徐や琦善についての見方も変わってくる。⁽²⁹⁾また民衆がイギリスへの抵抗を行った事例として有名な三元里事件についても、多分に宣伝のために作られた伝説というべき側面があると茅は指摘している。⁽³⁰⁾

茅は、歴史を道徳的な価値基準から解釈する姿勢を強く批判し、客観的で冷静な判断を打ち出そうとしている。しかし、旧来の道徳的褒貶に代わる基準を提示することは難しい。茅は「歴史学の最も基本的な価値は、過ちつまり失敗の教訓を教えてくれるところにある。歴史を鏡とするというのは、まさに過ちと向き合うことだ。この意味から言えば、一つの民族が失敗から

(27) 実は、イギリスにとっては清朝に対し儀礼的に「平等」な関係を強制することが重視されていた。James L. Hevia, *English Lessons: The Pedagogy of Imperialism in Nineteenth-century China*, Durham, N. C., 2003, pp. 49-73. アヘン戦争当時の清朝には、国家の対等性といった観念そのものがなかったからである。

(28) この考え方は、理論的枠組みの変化にともない、中国をイギリスの「非公式帝国」(informal empire) とみる説などへと形を変えてはいるが、いまなお根強い影響力をもっている。

(29) 茅前掲書。

(30) 茅前掲書、293-313頁。また、より早くこの点を指摘した研究として次がある。James M. Polachek, *The Inner Opium War*, Cambridge, Mass., 1992, pp. 137-175.

学んだものは、勝利したときに得たものを遙かに越えている⁽³¹⁾」という。ここには、民族の命運について沈思する態度が見られる。

たぶん、このような姿勢は、歴史学の国境を自分は乗り越えたと思っている人々から、「遅れた」論点と見なされるだろう。しかし、私は、茅のこの言葉に、胸をつかれる思いがする。茅は、アヘン戦争当時の政治が抱えていた問題、軍事をめぐる技術と態勢がはらんでいた問題を繰り返し指摘する。

茅は同書の末尾に記している。「19世紀はイギリス人の世紀だという。20世紀はアメリカ人の世紀だという。21世紀はどうか」。人によっては、21世紀は中国人の世紀だという。しかし、「最も肝心な点は、中国人がどのような様子で21世紀に入るべきかということだ」。

歴史がどのような選択をするにしても、私が思うに、アヘン戦争が我々に残した主要な問いとは、中国大陆と西方との隔たりは、150年余り前のアヘン戦争のときよりも広がっているのか、それとも縮まっているのか⁽³²⁾ということだ。

このような点は、やはり同書の背景にある問題関心をよく示唆している。茅は確かに道徳的な毀誉褒貶という旧来の史論を正面から批判しつつも、やはり中国の命運に深い関心を寄せている⁽³³⁾。彼は、広い視野からアヘン戦争という大事件を分析しつつも、易々と歴史学の国境を越えたりしない。しかし、世界は、はっきりと視野に入っている。

しかし、それならば、日本人である私が茅に対して、語る言葉はあるのだろうか。「黒船」の衝撃をいまだ忘れないような日本人がネメシス号について教科書に書いている説明をみて疑問を抱き、それで良いのかと考察するような作業は、やはり茅の見方を多少とも補うものとして、対話の糸口となるのではないだろうか。やはり、ともに世界史を構想し国境を越えようとするところに21世紀の可能性があると私は考えている。しかし、国境がないという幻想にひたっているわけにはいかないのである。

(31) 茅前掲書、25頁。

(32) 茅前掲書、583頁。

(33) 茅の著書についての論評としては、劉前掲書、79-82頁もある。

表：高等学校世界史教科書におけるネメシス号画像の説明（2012年印刷本による）

イギリスは、中国茶輸入の代価としてインド産アヘンを中国に密輸していたが、清がこれを禁止する強政策をとったため、戦争に発展した。アヘン戦争は中国の半植民地化の起点といわれている。	(世A011)『新世界史A』(桐原書店), 92頁【甲】
1841年1月、広州の珠江河口でイギリスの軍艦から攻撃を受ける中国のジャンク船。	(世A012)『世界史A新訂版』(実教出版), 114頁【甲】
〔当該画像に「アヘン戦争」との説明のみ〕	(世A013)『世界史A改訂版』(三省堂), 93頁【乙】
イギリスと清朝との軍事力の差は歴然としていた。安定したアジアの超大国にとって兵器の開発は不要であり、これに対して、数百年にわたり国家間の戦争がとぎれることのなかった西欧では、自然科学の発達と結びついて兵器の開発が進んでいた。イギリスの攻撃には民衆も抵抗した。	(世A014)『高等学校世界史A改訂版』(清水書院), 122頁【甲】
ここに注目 清軍とイギリス軍の船を見比べると、どのような違いがあるだろうか。	(世A015)『明解新世界史A新訂版』(帝国書院), 130頁【乙】
海戦で1枚帆のジャンク船にたよる清軍は、蒸気船(右奥)の軍艦をもつイギリス軍の攻撃にたちうちできなかった。	(世A016)『要説世界史(世界史A)改訂版』改訂版(山川出版社), 138頁【乙】
(炎上する中国の帆船) イギリス軍は、海上からの艦砲射撃では圧倒的な力を発揮したが、陸上では中国民衆のゲリラ的抵抗にあって苦戦した。	(世A017)『現代の世界史(世界史A)改訂版』(山川出版社), 104頁【乙】
イギリス軍は強力な兵器による艦砲射撃で清の軍艦を圧倒しながら北上をつづけたが、陸上では中国民衆のゲリラ戦術の抵抗で苦戦した。図は広州で中国船を攻撃するイギリスの鉄甲艦ネメシス号(右奥)。	(世A018)『世界の歴史(世界史A)改訂版』(山川出版社), 114頁【乙】
1841年、広州湾沖の海戦でイギリス汽走軍艦ネメシス号が中国のジャンク兵船を攻撃しているところ。イギリスの海軍力と火器が清よりもすぐれており、戦況は終始イギリス軍優勢のうちに推移した。	(世A019)『高等学校改訂版 世界史A』(第一学習社), 108頁【乙】
〔当該画像なし〕	(世A020)『世界史A』(東京書籍)
ネメシス号(右奥)の砲撃。イギリスと清朝の武器の水準は比較にならなかった。東洋文庫蔵。	(世A021)『新版世界史A』(実教出版), 110頁【甲】
〔当該画像に「アヘン戦争」との説明のみ〕	(世B008)『高校世界史B』(実教出版), 197頁【甲】
1841年1月、広州湾で、イギリス軍艦ネメシス号(右)に砲撃されるジャンク船。イギリス艦隊をむかえうった清の大砲のなかには、200年以上前のポルトガルから輸入したものもあり、それらは一発うつのに30分もかかったという。	(世B012)『新選世界史B』(東京書籍), 178-179頁【乙】
1841年1月、広州湾口でイギリス軍艦に撃破される清朝のジャンク型軍船。海上交易で活躍したジャンク船も、蒸気駆動のイギリス軍艦の敵ではなかった。	(世B013)『世界史B』(東京書籍), 319頁【甲】
広州の珠江河口での海戦(1841年1月)。炎上しているのは、清のジャンク船。右手後方に、蒸気機関を使ったイギリス軍艦がみえる。	(世B014)『世界史B新訂版』(実教出版), 283頁【甲】
1841年、広州での海戦でイギリス軍によって撃破される中国船(ジャンク)。	(世B015)『世界史B 改訂版』(三省堂), 242頁【乙】
(炎上する中国の帆船) イギリス軍は、海上からの艦砲射撃では圧倒的な力を発揮したが、陸上では、中国民衆のゲリラ的抵抗にあって苦戦した。	(世B016)『詳説世界史(世界史B)』(山川出版社), 270頁【乙】
(炎上する中国の帆船) イギリス軍は、海上からの艦砲射撃では圧倒的な力を発揮したが、陸上では中国民衆のゲリラ的抵抗にあって苦戦した。	(世B017)『高校世界史(世界史B)』(山川出版社), 229頁【乙】
〔当該画像なし〕	(世B018)『高等学校改訂版世界史B』(第一学習社)
広州での海戦のようす。ジャンク船の清軍は蒸気船のイギリス軍艦(右後方)に打ち破られた。銅版画、東洋文庫蔵。	(世B019)『高等学校世界史B改訂版』(清水書院), 138頁【乙】
〔当該画像なし〕	(世B020)『新詳世界史B』(帝国書院)
イギリス軍は強力な武器による艦砲射撃で清の軍艦を圧倒しながら北上を続けたが、陸上では中国民衆のゲリラ戦術の抵抗で苦戦した。図は広州で攻撃するイギリスの鉄甲艦ネメシス号(右奥)。	(世B021)『改訂版新世界史(世界史B)』(山川出版社), 288頁【乙】